

比較研究の方法論とその展開

鈴木 俊之

本プロジェクトは、本学の専攻科（多元文化専攻）において短期大学卒業後2年間学修し、「比較文化」という学問分野で「学士号」を取得する道が開けたということを中心に、多様な学問分野で行われる比較研究の実状を調査し、それぞれの方法論を明らかにし、今後の展開の可能性を検討することを目指し、進められた。

年報の前号で報告したように2015年度には7回の講演会を開催した。1. 辻吉祥「比較／差別のソフィスティケーション——素木しづ・キャリア・優生学」、2. Ping Wang（王萍）氏、「日本と中国の美意識——自然観を中心として」、3. 外山みどり氏「心理学における文化研究」、4. 樋笠勝士氏「経験と比較文化の可能性」5. 井上雅義氏「ソーシャルメディアによる途上国支援事業の影響と変容」、6. 野村祐之氏「比較研究の方法論と『オリエンテーション』——神学的試論として」7. 森下稔氏「多様性に富む比較教育学——よってたかって——」であった。

2016年度には5回の講演会を開催した。第1回は本研究プロジェクトメンバーの秋富創による「ライデン大学日本学科とオランダの教育制度」（2016年7月1日）、第2回は五野井隆史氏による「キリシタン信仰の形成と高山右近の信仰」（10月14日）、第3回は菅瀬晶子氏「ムスリムの肉食、キリスト教との菜食——ハラールをめぐるアラブ世界の食文化」（11月28日）、第4回は青木孝夫氏による「雰囲気としての景色（気色・景気）の美学——比較美学の観点からする日本の美意識の一面——」（12月19日）、第5回は本研究プロジェクトメンバーの橋本典子による「危機の時代の比較研究の可能性——コスモポリタニズムとローカリズム——」（2017年2月27日）、であった。それぞれの講演はテーマが多岐にわたっているだけでなく、内容も聞き応えのあるものであり、また講演会後の質疑応答などを通じて、より一層理解を深めることができる貴重な機会であった。その他、研究プロジェクトメンバーによる勉強会を開催し、各自の研究分野から比較研究の意義や意味についての報告があった。

本年報には2年間の研究成果として、研究プロジェクトメンバーおよび2016年度講演会第5回講演者の青木孝夫氏が執筆している。

青木孝夫氏は、「気象の美学序論」というタイトルで、新展開を見せる雰囲気の美学を横軸とし、縦軸に日本の自然美学を据え、霞や霧などの気象の美学的研究を通し、環境美学を進展させることを試みた。日本の文化は風土の影響を受けてきたことを確認した上で、日本や東アジアで展開してきた芸術や美意識は、文化相対論的に、ヨーロッパを基準・規範とする環境美学に修正ないし補完の必要性を迫ること、花月に雪を加え、或いは霧を歌う美的伝統は、美意識や芸術文化に投影し我々の感受性の基盤

となっていることを考察した。

秋富創は、「ライデン大学日本学科とオランダの教育制度」をテーマとし、特に日本との違いに着目しながら、オランダの高等教育制度の仕組みについて考察し、あわせて、2015年度の在外研究で滞在した、ライデン大学日本学科のカリキュラムを検討することを通じて、オランダにとって日本や日本学が有している意義についても考察した。

宇都宮由佳は、タイにおける日本食の受容実態を中心に、食文化比較研究の一考察を試みた。タイでは、外国料理で日本食店が最も多く、様々な日本料理を受容しつつも、タイの食事様式が維持されていた。また「寿司型ドーナツ」「回転寿司しゃぶ」が「サヌック（面白さ）」で受容されていた。日本では、タイ料理の材料や調味料が手軽に入手できるようになり、「ガパオ（鶏挽肉バジル炒め）」のレシピ検索データ数が年々上昇していた。今後、夏の「おかず」として定着する可能性もあることを指摘した。

鈴木俊之は、比較教育学における比較の意味を改めて振り返り、日本における比較教育学の現状と今後の課題について比較政治学との比較から考察した。比較教育学で比較があまり行われていない現状について批判的に考察し、比較教育学が教育学のなかで独自性を帯びて存立するためには、比較教育学は比較を対象としている学問であるという認識が改めて必要であることを指摘した。

辻吉祥は、2015年度はじめに行なった発表「比較／差別のソフィスティケーション——素木しづ・キャリア・優生学」に胚胎した問題意識を継続的に展開させる中で、「比較」の行為において国民国家というユニットが前提となる枠組みを問い直し、また従来の東西（文明）比較という視角が転位して「差別」性の学的肯定につながっている植民地認識について検証を行なうとともに、狭くは個々人の生命の優劣、「差別」を正当化する思想と物語についての分析を試みるなど、それぞれを個別的かつ総合的に考察し、深化させた。

中井章子は、33年にわたった青山学院女子短期大学における「比較文化論」講義をまとめ、「比較文化研究の方法」と教育について省みた。また、1800年前後のドイツの思想家のテキストを読み、「比較文化の意味」について考察した。

橋本典子は、「比較思想」の授業（専攻科）で様々な試みをしながら、従来の東西の比較研究の限界を強く感じたことを出発点として、21世紀に相応しい「新しい方法論」を見つけるために、まず、21世紀が如何なる時代かを明確にし、比較研究例の探索を試みた。「コスモポリタニズムとローカリズム——リスク社会における比較研究の可能性」の題で、ウルリッヒ・ベックを参考に、現代をリスク社会と捉え、それを、「世界市民としての超・国家的（トランスナショナル）見解」と、「個人の国家を含む地域社会の見解」の二重構造で考察すべき、とした。比較研究は常に自己に還帰沈潜し、現実を捉え、同時に最先端技術による想像的現実を、多様性を認めたうえで観るべきである、と考えるに至った。